

コラム

論より証拠

明治18年4月14日、東大講堂は「脚気菌」発見の大講演会があるというので熱気にあふれていた。緒方正規（東大教授）が脚気病の原因菌を発見したというのである。大学教授、助教授、陸海軍軍医官、文部書記官、有名開業医ら大勢は、この脚気細菌説に大きな期待をよせて参集していた。とくに脚気菌の発見を待ち望んでいた陸軍軍医官の喜びようは大変なものであった。当時の軍隊は5人に2人は脚気患者だといわれるほど脚気の蔓延に困っていたのである。

一方、以前から脚気栄養説をとんでいた高木兼寛（海軍軍医、本学創設者）は、すでに脚気の原因として栄養のアンバランス（白米に偏りすぎることを考え、その改善（白米を麦に代えること）によって脚気病の予防、治療に成功しつつあった。そしてこの栄養説の成果が出るにつれて、緒方らはこれを黙視することができず、原因菌をもとめて研究をすすめた結果、ついに「脚気菌」を発見したというのである。だからこの発見こそは東大陸軍グループが長いあいだ待ち望んでいた大ヒットであった。

講演会の状況から察して、これはもう学術の発表会というよりは、むしろ緒方正規の顕彰会に近いものであった。ライバルになった兼寛にも発言が許されたが、それは緒方の決定的な栄養説批判に対して兼寛がどのように反論するかという興味の対象にすぎなかった。壇上に立った兼寛は、しかし、自分の栄養説を簡単に説明したのち、敢然とこう述べたのである。「日常の開業医が脚気菌を見つけるのに顕微鏡を携えて往診するのはいかにも大変であろう。し

かもそれで脚気菌が見つかったとしても、その菌を撲滅できない以上、結局この説では脚気病は治せないのではないかと、普通の反論のしかたとは違って、如何にも実学主義者らしい反論であった。普通であれば、相手の不合理な点を指摘し、自分の合理性を主張するものであるが、彼はそのような理屈は言おうとせず、簡潔に、「自分は容易に脚気を診断できるし、また自分の改善食（麦食）でそれを完全に治すこともできる。しかし君たちの学説ではこの病気は治せないではないか」と言っているのである。ここに「理屈よりも実際」「論より証拠」という彼の実学的な学問観、医学観がはっきり示されているのである。

幸い、この脚気細菌説は、しばらくして北里柴三郎によってその実験の不備が指摘され、おのずと消えてしまったのであるが（脚気菌は誰にも追試、確認できない幻だったのである）、それでも東大陸軍グループは、まだ兼寛の栄養説をただちに認めようとはせず、のみならずこの学説で脚気患者が激減したという確たる事実さえも否定し続けたのであった。そして結局この論争の決着は日清、日露の両戦争まで待たねばならなかった（明治28年、38年）。兵食を麦飯に改めていた海軍からは、この戦争で一人の脚気患者も出さなかったのに、相変わらず白米食を続けていた陸軍からは膨大な数の脚気患者（約30万）とそれによる死者（約3万）をだしたのである。兼寛の栄養説の勝利は誰の目にも明らかであった。

日露戦争勝利の翌明治39年、兼寛は母校セント・トーマス病院医学校（英国）に招かれて特別講演をおこなった。彼はそれまでの脚気研究の経過を、栄養の改善のことから脚気を完全に予防できたことまでを三日間にわたって事細かに話した。著名な医学雑誌ランセットがその全文を掲載したため、欧米の医学者はこの兼寛の先駆的業績に大きい衝撃を受けた。とくに栄養説の正しさを、単なる考

えとしてではなく、現実の成果として示したことが極めて高く評価されたのである（ここでも「論より証拠」が評価されたのである）。

南極大陸の地名に「Takaki Promontory 高木岬」というのがあるが、これは英国の南極地名委員会が昭和 39 年に高木兼寛の名前をとって命名したものである。西欧の医学者にあたえた影響がいかに大きかったかが分かるのである。「高木岬」一帯の地名には「ホプキンス氷河」「エイクマン岬」など国際的に高名なビタミン学者数名の名前がつけられている。兼寛の業績はビタミン発見の先駆になったのである。